

『源氏物語』が
どのように
継承されてきたかを学ぶ

Arima Yoshitaka

有馬 義貴

奈良教育大学 国語教育講座

『源氏物語』がどのように継承されてきたかを学ぶ

奈良教育大学 国語教育講座 有馬 義貴

1. はじめに

『源氏物語』という古典文学作品があることを知っていますか。また、それがどのような内容の作品であるか、知っていますか。高等学校の教科書に掲載される定番の作品の一つですから、知っている人が多いでしょう。では、その『源氏物語』が、どのように現代まで読み継がれてきたのか、どのように継承されてきたのか、知っていますか。

2. 読み継がれてきた『源氏物語』

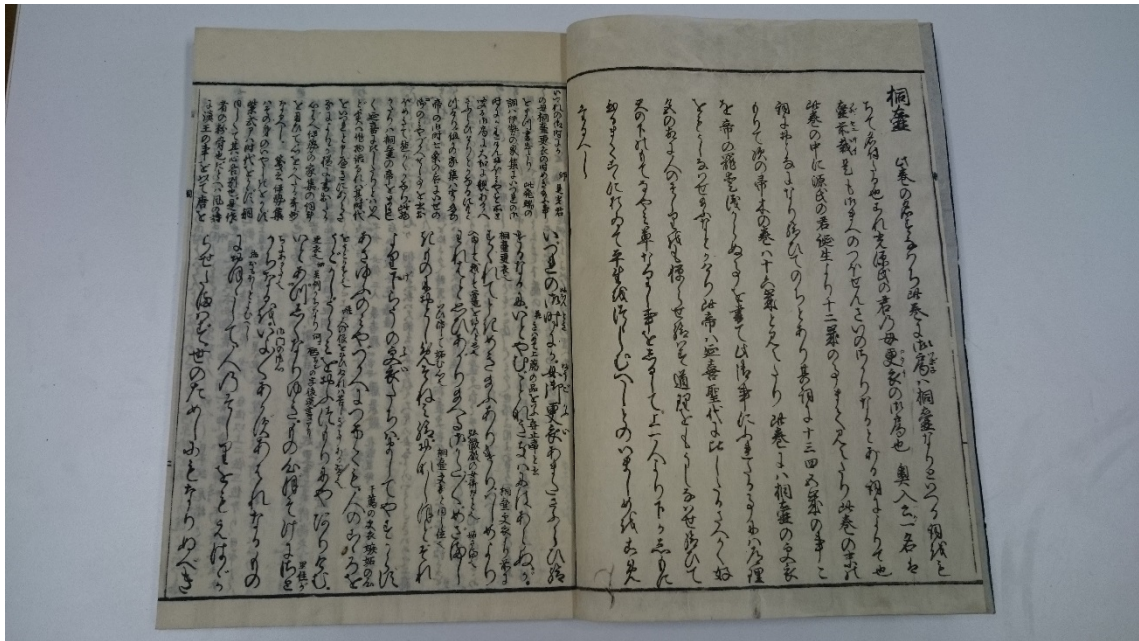
古典文学作品について、例えば、「長い年月にわたって、それぞれの時代に享受され、批判に耐え抜いてきたもの」¹といった説明がなされることがあります。しかし、『源氏物語』といった作品名やそのおおよその内容については知っていても、それが「それぞれの時代に」どのように「享受され」てきたのかまではよく知らない、という人はおそらく少なくないでしょう。あるいは、そのようなことについて考えてみたことがないという人も少なくないかもしれません。教科書や参考書、試験の中でしか古典文学作品に触れていないと、読み解く対象としての文章自体にのみ注目しがちで、昔からあった作品だという認識はあるにしても、それが古くから多くの人々に読み継がれてきたものであるということについては、なかなか意識をしにくいように思われます。

¹ 世羅博昭氏「古典領域における実践研究の成果と展望」(『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書出版、2002年)。

当然といえば当然のことですが、『源氏物語』を読んでいたのは、成立当時の人々や現代の私たちばかりではありません。平安時代に成立したとされる『源氏物語』は、以後、鎌倉時代や室町時代、江戸時代といった、それぞれの時代の人々によって、それぞれに享受されてきたものなのです。そのような長い享受の歴史は、現代の文学作品が持ちえない、古典文学作品ならではの要素であるといえるでしょう。せつかく古典文学作品について学ぶのならば、そのような“ならではの”要素にも、もっと目を向けてみるべきではないでしょうか。

『湖月抄』^{こげつしょう}という書物を例にとってみましょう。『湖月抄』とは、江戸時代に北村^{きむら}季^き吟^{ぎん}という人物によって著された『源氏物語』の注釈書です（1673年成立）。自説だけでなく、『細流抄』^{さいりゅうしょう}（1510～1514年成立）、『孟津抄』^{もうしんしょう}（1575年成立）といった書を中心に、『河海抄』^{かかいしょう}（1362～1368年成立）、『花鳥余情』^{かちょうよせい}（1472年成立）等の古注釈書の説を取捨選択して付しており、それまでの諸注を集成したものとなっています。このような書物の存在を知ると、『源氏物語』が確かに各時代の人々によって読み継がれてきたものであるということ、少しイメージしやすくなるのではないのでしょうか。





『湖月抄』（奈良教育大学図書館所蔵、913.361-14）

また、写真にみえる文字にも注目したいところです。現代の私たちが日常的に目にしたり書いたりする文字とは字形などが大きく異なっています。古典の本文を現代の活字で読むことに慣れてしまっていると、それがもともとのようなくずし字で書かれて伝わってきたということを見過ごしがちになるような気がします。

ちなみに、写真の『湖月抄』は印刷された書物ですが、江戸時代に印刷技術が発達して出版文化が形成されるまで、古典文学の本文などは基本的に手で書き写すことによって広まり、受け継がれてきました。そのような事実も、また、それゆえに生じうる誤写などのような現象についても、教科書などで既に現代の活字になおされたものばかり見ていると、やはり見落としてしまいかねないのではないかと思います。

3. 『源氏物語』から新たに生み出されるもの

さて、言うまでもないことではありますが、前節で紹介した『湖月抄』という書物は、『源氏物語』の注釈書ですから、『源氏物語』という文学作品がなくては成立しえないものでした。あるいは、『源氏物語』という文学作品があったからこそ、そこから新たに生み出されえた文化的産物であったという言い方も

できるでしょうか。

『源氏物語』から新たに生み出された文化的産物は注釈書の類ばかりではありません。例えば、『源氏物語』の代表的な場面を描いた絵画などがわかりやすいでしょうか。平安時代後期のものとされる国宝源氏物語絵巻などがよく知られるところですが、『源氏物語』の絵画化は、平安時代ばかりでなく、後の時代においても盛んにおこなわれました。江戸時代には庶民に親しまれた錦絵（浮世絵版画）としても大量に制作される²など、その時代の特色と結びつくような形で生み出されるものがあったことも注目に値するでしょう。大和和紀氏『あさきゆめみし』など、現代における『源氏物語』の漫画化などについてもそれに通ずるものと考えられることができるかもしれません。また、『源氏物語』の戯曲化も、時代の特色などと結びつきつつ新たに生み出された文化的産物としてわかりやすい例の一つでしょうか。能や歌舞伎、現代演劇や映画等、それぞれにおいて『源氏物語』を素材とした演目、作品がいくつも生み出されてきました。

そのように、『源氏物語』は、古くから読み継がれてきたものであるというだけでなく、それぞれの時代において新たな文化的産物を生み出すもとにもなってきたものなのです³。例えば吉井美弥子氏が、「日本という場にかぎってみても、十一世紀初頭に誕生してから約千年のあいだ、『源氏物語』は時代ごとに、受容者層によって、実に多様なかたちで享受され、新たな意味を付与されつつ今日にいたっている」、「この物語について語ることは、ひいては日本文化とは何かという問題を照射することにもつながるだろう」⁴と述べているように、『源氏物語』の享受のありようをみることは、それぞれの時代における文化のありようの一端を捉えることにもつながりうるものではないでしょうか。

4. 古典文学の継承に関する学習

従来の古典教育（学習）では、『源氏物語』などの古典文学作品について、古

² 中野幸一氏『フルカラー 見る・知る・読む源氏物語』（勉誠出版、2013年）などを参照。

³ 立石和弘氏・安藤徹氏編『源氏文化の時空〔叢書・〈知〉の森5〕』（森話社、2005年）などを参照。

⁴ 吉井美弥子氏『『源氏物語』という文化 序にかえて』（『〈みやび〉異説——『源氏物語』という文化〔叢書・文化学の越境3〕』森話社、1997年）。

くから読み継がれてきたものであるということを前提に、その普遍的な魅力を探るといった立場から、作品自体を読むことに重きが置かれ、ほとんどの時間が費やされてきたような印象があります。

勿論、作品の内容を捉えることも重要なことですが、一方で、これまで述べてきたように、その作品がどのように読み継がれてきたのか、受け継がれてきたのか、という点に目を向けることで学べる要素も少なくないのではないのでしょうか。片桐洋一氏は、「学校教育の場に「古典の時間」があるから「古典」なのではなく、人々に読まれ続け、愛され続けたから「古典」なのです。そのことをわかっていただくためには、「創作の文学史」だけではなく、「享受の文学史」という視点をもっと導入しなければならないと思います」⁵と、いみじくも述べていますが、首肯すべき提言といえるでしょう。

5. おわりに

学習指導要領において「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられて以降、古典教育(学習)の果たすべき役割はより重要視されるようになってきました。2011年度からは小学校でも古典教育(学習)がおこなわれています。中学校・高等学校での古典教育(学習)もそれを踏まえたものとなっていくでしょう。古典の魅力や価値について、作品自体の内容からも勿論ですが、それ以外の観点からも多角的にとらえていくことが、ますます必要になってくるのではないのでしょうか。今後の古典教育(学習)はどうあるべきなのか、ぜひ多くの人に考えてみてほしい問題です。

⁵ 片桐洋一氏『『伊勢物語』の本文と『伊勢物語』の享受』(『伊勢と源氏 物語本文の受容』臨川書店、2000年)。

有馬 義貴 (Arima Yoshitaka)

- 2011年 早稲田大学大学院 教育学研究科
博士後期課程単位取得退学
- 2011年 湘北短期大学・聖学院大学・
早稲田大学 非常勤講師 (～2014年)
- 2012年 法政大学 兼任講師 (～2013年)
- 2013年 早稲田大学大学院 教育学研究科 博士 (学術)
- 2013年 立教大学 兼任講師 (～2014年)
- 2014年 奈良教育大学 准教授



【研究テーマ】

『源氏物語』を主な対象として、平安時代の文学作品の表現や構造、享受の問題などについて勉強しています。また、現行の古典教育（学習）が抱える問題についても関心があります。

【著者の自己紹介】

—**今の研究分野を選択したきっかけ** 古典文学について学ぶようになったきっかけは、大学に入ってから『竹取物語』を通読し、高等学校までの勉強では気づけなかった古典文学の魅力に触れたことです。その後、大学院でご指導いただいた先生からの影響もあり、『源氏物語』を研究対象とするようになりました。

—**休日の過ごし方** 時間のあるときには、いわゆる文学散歩をします。実際に寺社や史跡などに足を運び、目で見ることなどを通して学べる要素も多いので、学生たちと一緒に出かけることもあります。

『源氏物語』がどのように継承されてきたかを学ぶ

著者 ありま よしたか
有馬 義貴

2016年2月29日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>